明治三十一年十二月二十六日郵信省第三種雜誌特許
第六十號、毎月二回(一日、十五日)發行
明治三十四年八月一日發兌

改革時報

社說
◉西藏の研究……◉夏期講習會
論說
◉德川時代の救濟事業……安達愚佛
◉宗教に對する誤解……鳳氣至彦浦
雜錄、
◉蟬おぐれ……小虛人
信眾
◉本法院義讓講師に就て……富田泰巖
社會
◉從順の心……清澤滿之
◉喇嘛教貫主滯東中の模樣◉紛々錄

第六十號

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
五、公認教制度を調査すること。
六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。
八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
十一、殖民傳道を奬勵する事。
十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

○政教時報第五十九號目次

社説 ◉太平無事……◉迷信
論説 ◉我邦維新以前の慈善事業(承)(前)(安達愚佛)
◉帝國主義……(鳳氣至洪雄)
雜録 ◉先德餘香(其六)……(文學士 本多高陽)
信家 ◉無我觀……(佐々木月樵)
社會 ◉現内閣の宗教法案に對する感情
◉喇嘛僧の渡來等

本誌廣告

一、本誌は毎月二回(一日、十五日)發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應せず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無遞送料

◉廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地
發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十四年七月卅一日印刷
明治三十四年八月一日發行
發行兼編輯人 百目木智燈
印刷人 横木朝太郎

政教時報

西藏の研究

由來西藏は世界の秘密庫で有て、之を開ける所の鍵鑰を何人も持合せて居ぬい、冒險心に富んで居る泰西人士も西藏の探險には弱り果てゝ、未だ一人も成功した者は無い、世界最古の文明國たる支那印度に隣りして居りながら、宗教も古くから立派なのが這入りて居りながら、此地方に向ては未だ一人のリヴィングストンもなくスタンレーも出さず、其内地の狀況の黑暗々たることは、亞弗利加内地等よりも數層甚しいとは寔に不思議な次第である、知れ無くとも政治上、宗教上其他百般の事に左程關係が無いか、又は彈丸黑子の地に留るならば構はないけれども、其地の廣袤を言へば彼が如く尨然たる大國で有て殆と支那本部と相匹敵する程である、其位置から言へば英領印度や、佛國の勢力範圍たる南清や、前印度等は其南方より迫り、露國の勢範は其西より北より次第に之を壓して來る、而して其領主たる愛親覺羅氏は今日の如き憐れな僅に殘喘を保て居るといふ有樣である、殊に彼北清の擾擾以來、列强の利害關係が益密接して來て、滿州の廣野が一時爭點と成て居たが、其問題が未だ片付かざるに早く既に西藏問題なる者が起りて來て、ダライ喇嘛の使節が聖比得斯堡のザーに謁見したとかいふて底氣味の惡るい話もある、

我日本も嚴爾たる島帝國裡に安逸を貪るのみで滿足するならばドーカ知らぬが、苟も勢範を擴張して東洋の覇權を握らうと欲するならば矢張西藏問題を雲烟過眼視してはなるまいと思へる、否々コーいふ大問題に對して一たび注意を怠り措置を誤たならば、帝國の勢範を擴張することは扨措いて、從來獲得し來た所の利益、勢力、安寧をも或は失墜する樣なことは有るまいかと心配せられる、

昔羅馬人が四方を經略して一大帝國を建設したのすら、我等は好んで戰爭を爲す者で無い、唯正當に國防の任務を盡したまでゃあると言て居る、實際羅馬人は其考で居たらしくあるし、後世の史家の評論も亦之を許す樣である、實に防禦と言へば唯退いて守ることの樣に思はるれど、時と場合に由りては我から進んで攻ひるで無ければ十分自衛の道を盡す譯に行かない事も澤山ある、此場合此狀態は昔の羅馬人のみ遭遇したでは無く、今の日本人も斯る場合に出遇ふ事が有るとすれば、我同胞は西藏を見ることはソー冷淡ではならぬ筈である、斯る政治上の見解の外に又宗教上の見樣が有らうと思へる、西藏には古く支那東晉の頃から喇嘛教が行はれて居ること、其教主はラッサに居て活佛として全西藏の教權教權を一身に掌握して居るといふ事は事實である、して其喇嘛教といふは佛教中の一大派で有て、西藏文の藏經もあり、宗教的組織も中々發達して居るである、之を研究し之を世に紹介するといふ事は寔に宗教家に取りては等閑に附すべからざる問題であらうと思へる、況して我邦の佛教家なぞは、此教と接近

し親密を結ぶことが出來るならば、其利益は莫大なものであらう、して見ると宗教家も西藏を冷眼で睥睨してる譯には行かぬ、又學問上から見るも人類學、言語學、地理學、博物學、醫學其他猶多數の科學に向て裨益することは大なるものであらう、去れば何れの點から見るも西藏の研究は怱にすべからざる氣運に迫て居る、

今や寺本婉雅、能美寛、等の諸氏苦心經營して進んで西藏に入らんと企てゝ居られる、是等諸氏の企望が達せられた日には、其學界に向て及び宗教界に向て洪益のあることは勿論、政治上にも亦便益を得られることは勿論である、加之邦人が世界の秘密庫に向て第一着に入り込んだ名譽は亦大なるもので、太沽や天津で一番乘をしたのよりも遙に大なる名譽であらうと思へる、諺にも言ふ如く百聞は一見に如かずであるから、西藏を研究するには先づ西藏に入るが第一必要條件であるから、官も民も政府も本山も是等入藏企圖者を助けねばならぬ、

夏期講習會

近來夏期講習會といふ事は一の流行に成た、教育、宗教を始め雜多の講習會が諸所に開ける、殊に教育講習會の如きは、多くは地方廳より保護を授けられるから、如何なる土地にも催される、是は甚だ結構な次第であるに相違無いが、併し富豪の子弟に蕩兒の多い樣に、厚き保護を受ける教育講習會には兎角形式に流れる事が多く、實際の效果は存外少い樣に思へる例へば縣廳より保護と奬勵を受けて居るから、講習生には出席の義務があるから、ドーモ熱心は少い樣に見受けられるといふ事は講師に招聘せられた人の皆認める所である、勿論地方に由りて熱心も違ひ、組織と講師とによりて効果にも差異はあるけれども、保護が多く且古くより行はれて居る地方程、躰裁や形式は整頓して居ても講習生の熱心は少い樣であるとは、講習會通の言ふ所である、是等は當局監督者の深き注意を請ひ度い所である、

宗教の講習會も年々大きくなり又數も增す、兎角に御祭り騒ぎに陷りて、外見の甚だ盛大なるにも拘らず、内容は最初の健全なる精神を喪失する樣に見受けられる、是等は未だ其弊害の甚しからざる間に、猛省を希ひ度いものである、又何れの講習會と言はず、講師たる人にも注意を願ひ度いのは、一週間や二週間の講習に於て、迚も何の學科と雖も、多分の智識の與へられるものでないから、其學の趣味と必要とを知らせ、刺激を與へて成るべく研究心を與させる方法を取て貰ひ度い、是等は何人も十分知て居られる話しなれども、ドーモ講義を聞いて見るに、多くは一問題を捕へて說明する傾きがある、是も惡いでは無いで、余輩は成るべく前者の方針を取て貰ひ度いと思ふ、

叢林近日似蟬蛻。　人告無邉蓍狗彘。
人生百年保者誰。　不爲死計專生計。

右詠商僧　行誠上人

論說

德川時代の救濟事業

安達愚佛子

本記事は德川禁令考、弘道會雜誌、及び芳野世經氏の談話等に依る

古代からの慈善救濟事業を時代を追ふて取調べて、寄贈したい考へで、曩に眞最初のもの丈を送りましたら、前二號に御掲載になりましたが、古い事は、尙取調る箇條がありますから後廻しとして、德川時代の救濟事業から書く事に致しました

前以て申述べたい事は、慈善事業と救濟事業との區別であります、慈善と云ふも救濟といふも、均しく貧民救助に關する事で、社會の方面から見れば何れも社會の病氣を療治するの方法に過ぎないのであるが、然かし慈善事業といへば、一己人又は多數人の慈善心からして、爲す所の事柄を指すものにて、救濟事業といふは、國家又は他の公法團體が、行政の一部として營む所の事柄を指すのである、例へば國立又は府縣市町村立の、養育院ありと假定して、是が單に租稅に依りて維持するの仕組ならば、救濟事業と云ひ得べきも、慈善事業とは名けられぬ、若し又國家或は府縣市町村が管轄する所のものであつても、租稅を用ひず、慈善者の寄附金に依りて維持するの方法ならば、國立又は府縣町村立の慈善事業と云ふて指支へない

此區別が相當であるや否やは知らぬけれども、予が此事業の事を記するに當りては、此區別を用ゆる積りで、單に救濟事業を書たものは、國又は下級の行政機關が租稅を以て爲す所の事業を指し、慈善事業と云へば、慈善家の爲す所のものを指すのであります

德川時代に於る、江戸の窮民救助法は、中〳〵行屆いたものであつて、先づ大體を分て所謂屋外救助と屋内救助の二種とし、屋内救助は、更に臨時と、常設の二種に分れて居た

窮民救助として、米錢を給與するの方法は、即ち屋外救助で、火災水難等の節に救小屋を建てゝ衣食を給與する事もあつた、是は臨時屋内救助であるが、今爰には常設の屋内救助に屬するものゝみを記さうと考へる、而して當時の常設救助場といふものは養生所、寄場、溜の三ヶ所でありました

養生所は、唯今の小石川なる帝國大學附屬植物園の中に在りて、同園は元御藥園と唱へて居た、後に出す觸書の文面に依て見ると、是は養生所に要する藥草を植た所から、名を得たのではなく初から、幕府に要する藥草を作てあつた處から、御藥園と名けたに相違ない、古代から施藥院又は療病院のある地には、必らず藥園が附屬して居たのであるが、爰にも昔の方法に習ふて養生所と名くる貧病院を藥園の中に置たものであろう、此養生所は江戸市街に於る貧病人に施藥し、又は入院せしめたのである

養生所の起原は、今を距ること百八十三年、八代將軍吉宗

公の治世、享保七年有名なる大岡越前守、中山出雲守が江戸町奉行の勤役中に當り、麹町十二丁目三郎兵衛なるもの〻店に、住で居た町醫者の小川笙船と云ふ人が、施藥院設立の事を目論見て、町奉行へ出願し、奉行より公儀へ上申の末、設立の運びに至り、乃ち江戸町奉行の管轄に屬する施藥療病を兼たものとなつたので、當時小川醫師から出願の趣意書は左の如くであります

施藥院被仰付候はゝ難有仕合奉存候、町々極貧の病氣と奉伺候に、不便千萬の仕合共に御座候、武家方よりも、奉公人大病に付、請人方へ返し候處に、請人も親族にても無御座候者は、散々に看病仕候、不道人も多く御座候、貧窮人の類ひ候には、見殺しに仕候事共多く御座候、院料の儀は、御當地町々の名主御停止に被仰付候ハヾ、名主料金を以て、町々より被召上、院料に被仰付候ハヾ、御足し金少々の儀にて相濟可申哉と奉存候、左候はゝ施藥院御普請料計りの儀にて、可相濟と奉存候、此儀も少々は御物入に足し金愚意に存じ當り御座候、名主請役の儀は、町々家持ども へ廻り名主と申事、被仰付候得者、御公用辨じ申儀、只今の通り、有レ替儀御座ある間敷と奉察候、町人共は名主料を御公儀様へ差上候ても、其外の名主へ一ヶ年中に遣し申金子、多く御座候を申、加德分に而御座候間、悦可申と奉存候、(此處文意少し解し難きが如きも其意味は是まで普通名主料の外に一ヶ年の中に名主へ遣す金は中々多き事ゆへ名主料だけを公儀へ差上げて濟ひ事になれば是迄の樣に餘分の金が入らぬ樣になるから町人どもは加德分に御座候とて悅ぶとの事ならん)名主共の儀は、御政道をたすけ候を、當時の名主共は、欲心おごりのみにて、却て御政道の妨げに相成候事共も、仕出し申候、此儀御尋候はゝ、町奉行所へ口上にて可申上候

右は小川醫師より、上申せし書面の抜萃なるが、此の事に付ては町奉行は、小川へ直接口上にて取紛したるものと見ゐ奉行から公儀へ差出したる添申書の抜萃は左のものである、爰に餘事ながら注意すべき點は、小川の書面に依れば、當時の名主は不扁者が多くて、町人どもへ入用を多く掛くるから家持どもの廻り名主として、今の名主を廢し、其名主料にて施藥院を立れば、町人は大喜びで、一舉兩得なりとの趣意が見ゐて居るとである、斯ると表面申し立た小川の名主可廢論を取揚げぬ以上は、之に對して何分の申譯がなくてはならぬが(名主共の儀相尋候處外に變り候儀も無御座候)と之を曖昧の裡に申譯けたは誠に巧妙なものである

此ヶ條儀は、江戸中に施藥院一ヶ所御建、便りなき病人入置き、御扶持人醫者衆之内、代る〻〻療治致し、看病人は、老衰致し便りなき男女可有之候間、其者共を施藥院へ入置申候はゝ可然旨申聞候

名主共之儀相尋候處、外に變り候儀も無御座候、支配の者へ名主料の外、入目を掛候に付町々の物入多候之由、笙船申候、然ば只今急に名主揚、相止候ても難レ仕可有御座哉、家持共へ廻り名主可申付儀も如何有之哉に奉存候、笙船兎

角名主相止可然旨申聞候

寅正月廿一日

右は終に公儀の採用する所となりたるが、其養生所の地坪は御藥園の内が千坪にて、其建物は一時に建たものか、漸次に建てたものか、明かならねども、天保の始頃には病人部屋が五棟で、うれが女部屋、九尺部屋、新部屋、北部屋、中部屋と分れて居たそうである

愈設備が成就したに付ては、同年町奉行から江戸中の名主へ達したものは、即ち同所の入院規則とも申すべきもので左の通りである(併し當時の觸書の文章は讀み難きふしも少なからねは讀み易く改めたるが意味は少しも損せぬ考なり)

一此度小川笙船より、極貧病者のため、施藥院設立の儀願出に付、取調の末、小石川御藥園内に於て病人養生所設けられたるにつき、町々極貧の病人にて、藥も給し兼候もの或は獨身にて病氣なるも看病人もなく、又妻子ある共病氣にて養生もなし難き者の類は、養生所に入り滯在して治療を受くべし、尤も治療中は食事より衣服夜具等まで扶持し、諸事不自由なき樣に仰付られ候間、其身歩行叶ひ候者は格別、若し歩行なりがたき病人は、家主或は親類店請人、又は相店の者なりとも相頼み、支配所へ申出、名主吟味の上判鑑を持たせ四ツ時前後より七ツ時までの内に、直ちに養生所へ差出すべし

一養生所へ書ばかり通ひて、療治を請けたしと思ふものは其所の名主へ申出、名主の印鑑を持ち直ちに養生所へ參り治療を受くべし

但し通ひ患者は、別に扶持は下さらず

右の通に相心得療治受けたきものならば、養生所へ差越すべし、右等難澁の病人を、暫し世話するを面倒に思ひ、訴へ出ざる樣に取計ひ、差留めたること相知れ候はゝ、名主五人組の落度たるべし

其翌享保八年には、尚左の如き達しありたり

一小石川養生所へ遣すべき病人は、先達で看病人なきものばかり差越すべき旨相觸れ候得ども、自今は看病人なりとも、又は寄子の類たりとも、極貧にして藥をも給し兼候ものは取調べ養生所へ差遣すべし

右の達しありたるにも拘はらず、名主五人組頭などにて出頭の手續を迚ぶを面倒がりて、世話を爲さゝるものも多かりしと見へ同年尚左の達しがあつた

一先達而相觸れ候、小石川養生所に於て、極貧の病人御扶持下され、幷びに通ひ病人とも養生仰付られ候に付、逗留の病人は支配所へ申出、名主にて取調べ、病人差遣すべき筈の處、心得違の儀も有之哉、又は支配所へ申出る事を大事に存じ候歟、彼是世話いたし候を六ヶ敷存じ、願人有之候ても家主等まで、其儘に捨置き候樣に、風聞有之候、之に依つて向後支配所へ申出候儀無用に致すべく候、家主にても相店のものにても店請人にても、一人丈病人に付添ひ名主又は名主なき町は、月行事の判鑑を養生所へ持參可致

候同町役人取調の上、長屋へ入置き養生致させ候間、一町毎に名主家主とも病人の有無を取調へ、病人あらば養生所へ差遣すべし、本道(内科の事)外科眼科の御醫者衆に仰付られ、毎日相詰候て療治有之候間、地借り店借りのものまでも、念入れ申聞かすべし

滯在病人の定員並其取扱方

享保八年創立當時の滯在定員は幾名なりし歟不分明なれ共、享保十四年には一日滯在の定員百五十名と定めたるが、同十八年には更に百十七人に改めたり、同十八年の觸に曰く

一若し願出ありし時滿員なれば、相待たせ置き缺員あり次第出願の順序に依り、呼出し改所にて興力肝煎立會の上、貧窮にて服藥もなりがたき實否取糺し、相違なき時は、醫師診斷し病氣に紛れなきに於ては、願の通り滯留申付くべし

一願書持參の節、各町より豫て差出したる名主判鑑に照合し相違なき時は書面受付置べし

一病人滯在療養は八ヶ月以内と定む

一夜具布團布子單物等は御貸下けの事

一病人の宿元よりたべ物其外の贈り物、不相應これなき樣取調の末相渡す事

(以下次號)

宗教に對する誤解

鳳氣至蒼浦

近頃宗教の討研せられ修養せらるゝ者都鄙を撰ばす老幼を問はず益〻其の衆きを致す、然もうの迷執に溺惑し誤解を抱懷する輩蓋し少なしとせず之れ此稿ある所以なり、

宗教は宗教の本質あり領域あり、哲學の本質と混す可らす倫理の領域と交ゆ可らす豈に文學と同一視す可けんや、故に哲理を以て律せんとする非、道德を以て難す同しく不可、又何ぞ文學もて較す可けんや、「ベイコン」は哲學者なり而も彼が裁判上賄賂を懷にせしの故もて彼は哲理を解せさる者と批評するあらはそは業でに批評する者の愚なり、「シイクスピヤ」は文學者なり而も彼が青年の時鹿を盜みしの故もて彼の文學は毫も價値なきなりと斷定するあらはうは既てに斷定する者の陋なり、俱に是れ倫理上より評價せんと欲する者、杓子定木の標準も又甚しからずや、宗教家が教育を知らずと非難し教育家か宗教を証らずとて誹謗するは全く御門違なり、「ベスタロジー」此性格に「ウィスレイ」の信仰を追求するは是れ違門の鍵ならずや、宗教者に道德の實踐を要求するも亦甚た誤見なり此故に某管長に不品行あり或牧師に不行狀ありとするも直ちに宗教家に非すと斷言す可らす、某教會若くは或る本山に合理的信條の確立なしとて直ちに教理に契當せすとて排付する者は則ち哲學上より宗教を評騰せんと欲するの誤見なり、寺院制度に學校組織なしとて嘲げる者あらばそは嘲ける輩の大早計なり、要は宗教は宗教にして夫已外の者と全く無關係なり、毫も拘束せられざるなり、文學が文學の本質を詮表し哲學が哲學の領域を開拓せは以て足れりとするが若く宗教は宗教の本質を詮表し其領域を開拓せは以て餘ま

りあり豈に倫理教育抔の補助を要せんや、佛陀の胸奥に宿りて眞實の安心を決定し生死の波瀾に動亂せられす大悲の攝護を蒙り無涯の法界に逍遙する者は佛教なり、眞神の腦裡に住して敬虔の信仰を確立し有限の巷邊に躊躇せすして全能の榮光に照され恒久の天國に師事せんとする者は基督教なり、夫れ如斯唯宗教は宗教の第一義諦に存して信者は其体達にあり、其已外何等の制約を受く可らす又何等の拘束を得く可きに非さるなり、時に哲學の夫れと合一する場合、倫理と揆一する點、又文學と歸向する所あるは是れ偶然の暗合のみ蜉蝣の短期のみ何ぞ持續連環す可けんや、若し夫れ全然同一にして毫も異なるなきものなりとせは混沌として其名稱すら彙類す可らす、業でに格別なりと云各、獨立せる部門なるは明白なり、茲を以て時に宗教に反抗し撞着するあるや其本質を貫き其領域を拓かんには全く彼等已外の者と對抗爭鬪せさる可らさる必要もある可し、時に哲學或は文學又倫理滔々迎へて國家に抗し亡ぼすやも知らす國民に反して滅するやも計られす、彼等亦各其本領と屬域に據りて貫き拓く可きは元より其所なり、何ぞ其本義を曲けて異分子と和するの愚を學ふを要せんや、法律學者云はずや法律は必しも正義の觀念と實行とに追從する者に非ず時に之と抗せざる可らずと、政治學者謂はずや政治は必ずしも國家の慶運を增進する者に非ず或は之と爭はさるを保せしと蓋し妥當の言句なり、宗教又然り此理と始終す、然れ共、國民を滅し邦家を滅し滔々相延ひて倫理教育文學哲學と對抗し爭鬪せんが爲めに宗教は生れたるものには非らで宗教は宗教として存在せんが爲に生れ出でたる事倫理文學哲學抔の存在せると一般なり、故に其本質に反抗するあらば人類と云へ共滅せざる可らす其領域を犯すあらば邦家と云へ共亡さゝる可らす、前後八回の十字軍の戰爭は是が爲めに起りしなり石山合戰は之が爲めに興れり、否長く全歐を狂ひ荒せる新舊兩教徒の鬪爭は之を證して餘まりあるに非ずや、世の人動もすれば宗教は全然非戰爭主義にして平和の喧傳者なりとするものあれど是れ宗教の歷史を无視し宗教の本義を解せざる輩の陋見なり、宗教は又學問の大敵なるやも知らず西洋中世の哲學を沈滯し委靡せる者は基督教の神學なり、近世の初葉「ベイコン」が痛く罵倒し排斥せるは此故なり、宗教は國家若くは人民を滅亡せしむる者なるやも計り知る可らす、釋迦を出せる袈彼羅國は間もなく滅せるは此故なる歟、基督を生める猶太は早く亡國の民たるは此故なる歟、吾人は此點に關して韓退之が佛骨表の一所論は必しも理なき戲論なりと信ず可らず、宗教信者必しも善良の人間ならず現代の刑法學者は宗教信者に犯罪人多しと統計せらるゝを見は寧ろ宗教信者は无宗教徒よりも惡人ならずや、慘酷暴虐なる「クロムウィル」は熱心なる基督教徒に非すや、无法驕慢なる「ルセリウ」は敬虔なる基督信者に非すや、牛と金とを盜める道德は蓮如上人の遺弟にわらすや、宗教者必しも忠君の精神に富めると云ふ可らす、盧山の慧遠が信念に適はされは萬乘の敕使と云へ共排拒せしに非すや、親鸞が信仰に合はざれは主上臣下背義違法と毫も假借する所なし、日蓮上人は鎌倉の

執權に拮抗して少しも憚る所なきに非すや、佛教學者必しも佛教信者に非す、五山の學佛僧徒は概ね无信仰者なりしに非すや、基督教の神學者必しも其使徒に非す、中世の神學者は多く无信仰者なりしに非ずや、是れ倫理學者と道德者と異なれるに同じ、英の「シジユイック」獨の「バウルゼン」は現代の有數なる倫理學者なりと云へ共必しも道德家なりと云可らず、教育學者必しも教育家ならず「ペスタロウジー」は熱心なる教育者なりと云へ共而も純粹なる教育學者にはあらず、眞宗を開闢し覺他せしめたる親鸞は肉食妻帶せしとて誰か宗教家に非すと否定する者ぞ、維摩が俗服し世人と毫も撰ぶなしとて誰か佛教信者に非すと排拒する者ぞ、要は唯宗教の第一義諦に造詣するにあり、

然るを人は云將來の宗教は倫理化せざる可らずと又世に傳ふらく日本の宗教は國家化せざる可からずと藿々立論する者あり是れ謬見の甚しき者、吾人は更らに敢て問はん、將來の哲學は倫理化せざる可らすと論する者あらは如何、外國文學が日本に輸入する爲め日本化せさる可らすと談する者あらは如何、之を耳聞する者誰か其陋見と大膽とに驚かさらんや、「イミールゾラ」の極端なる慈愛小説はうれとして存す可きなり而して世界の文壇は能く讀破し措ざるに非すや、何ぞ必しも道德化するの蛇足を畫くを要せん、「トルストイ」の宗教は斯國固有の希臘教と同一徹なるを要せんや、彼の胸裡に燃ゆる信仰はそれに任せて可なり、何ぞ夫れ他の從屬を欲せんや、世に眞俗二諦の關係は雙翼兩輪の如く併存するものなりと說くものあるも是れ又宗教の本義と領域とを解せさるものゝ迂論なり以て評價する程の估價なきなり、

宗教は宗教なり其本質を存有すれは足れり、其の領域を開拓して餘りあり、哲學の本質と混す可らす、道德の領域と交ゆ可らす、豈に文學と一致するを用んや、要は其第一義諦の體達にあり雖緣狀を公にして已が妻を離婚したる不道德家「ミルトン」は大文學者として「ピユリタン」として毫も其價値を損せざるなり、哲學者として懷疑无體系の思想を抱ける「パスカル」は嚴肅なる道德家として、敬虔なる基督教信者として何ぞ其估價を失せんや、敢て世の人の宗教に迷惑せるものゝ爲めに告く、

社會

喇嘛教貫主滯東中の模樣

隣邦の大賓、喇嘛教貫主阿嘉呼圖克圖の一行、京都の遊覽を終りて、去る廿一日午前十時四十八分新橋着の瀛車にて東上せらる貫主は海老茶緞子の文那服を纏ひ、支那帽子を頂き、念珠を手にして、隨行員蒸巴爾甲木素以下八名を從へ、極めて應容の態度を以て下車するや、各宗の道俗、東亞佛教會、東亞同文會、大日本佛教徒同盟會の會員等、その他の有志者數百名の出迎を受け、北京より同行せる大河内秀雄卿の案内にて待合室に入り、この處にて三浦梧樓子は各宗道俗を代表して貫主に面し、中西重太郎氏の通譯にて歡迎の辭を陳べ、

貫主之に答禮せり、終りて貫主は大谷派にて用意せし馬車に乘りて大谷派淺草別院に入らる、着後直ちに各宗僧侶、大谷派府下末寺、大日本佛教徒同盟會總代、東亞同文會總代、東亞佛教會總代等に挨拶ありそれより晝餐を終へて、本堂に參詣し、いと鄭重に讀經念誦せられぬ、京都本願寺より隨行せるは、白尾義夫、松ヶ枝賢哲の兩師にして、北京より同行せる寺本婉雅氏も亦隨從したり◎貫主一行は廿二日午後一時より淺草願寺輪番大草惠實師の案内にて淺草觀音に參詣し燒香禮拜默誦の後、同公園内を縱覽して、寫眞師江崎禮二に於て撮影したり◎此日午前十時工科大學在學中の印度留學生三名は釋尊の遺民といへる名目の下に貫主を訪問し菓物を盛りたる籠を贈れり◎翌廿三日午前九時同じく大草師の案内にて隨行員一同と共に芝增上寺に詣りしが同寺にては一山の僧侶五十餘名山門に出迎へて本堂に案内し、貫主は禮拜後黑本尊に參詣し、殿堂の建築を一覽したる後、客殿に於て淨土宗管長野上雲海師と會見し、それより二代將軍の廟に參詣して結構の壯麗なるを賞讃し同寺の什寶なる五百羅漢の畫幅その他輪藏に在る大藏經等を一見せられたり◎それより代議士野間五造氏の案内にて貴衆兩院を參觀し、再び增上寺に引返へして日本料理の晝餐を受けられたり、◎此日午後清國代理公使は貫主を淺草別院に訪問したり、◎二十四日には午後二時より大隈伯の案内にて早稻田なる東京專門學校に赴き、講堂、圖書室、寄宿舍等を參觀し、大隈伯の庭園内にある花堂に於て伯の饗應を受け、快談に時を移したり、◎此日は又隨行員一同、及大草氏白尾氏、並に野間五造氏と共に東京帝國大學に至り、坪井博士は一行を撮影し、それより理科大學に至り田中館博士の說明に依り物理學教室を一覽し、坪井博士の說明に依り化學の實驗を見、次に工科大學に至り辰野同大學長の案内にて、應用化學、造船學、機械學等の列品室を一覽したり◎二十六日には午後二時より東亞同文會、國民同盟會同志倶樂部の有志者の招きに應じ星ヶ岡茶寮に赴かれぬ、先づ島津伯爵は謹嚴の態度を以て歡迎の趣意を陳へ、次に貫主は之に對して答辭を陳べ、それより點茶、及び支那料理の饗應を受けたり、當日の出席者は島津伯を初め、佐々、遠山、箕浦、神鞭の諸氏外二十餘名なり、◎貫主には又二十七日午前十時四十分、學頭を隨へ、清國公使館員、及び白尾義夫氏等を同伴し、宮内省に出頭して田中宮内大臣を訪ひ暇きに北清役の際、薩和宮に於て、同貫主以下教徒三百余名の餓渴に瀕せし際、我軍隊より分捕米の分與を受け、その他種々の保護を與へられたる爲め、我軍隊の好意に對する御禮の執奏を請ひ次で東御車寄に伺候し、天機を奉伺し、正午頃退出せられたり◎同日宮内省より退出後直に大倉喜八郎氏を訪問して種々の宗教談を爲し大倉氏より供齋を受けられたり、◎其の歸途帝國教育會の招待に應じて同會に赴きたり、來會者は定刻前よりつめかけ滿場立錐の地なきに至れり貫主は辻會長の紹介を以て一場の挨拶を爲し、從僧之を支那語に譯し、更に白尾義夫氏之を通譯し、次に蒸巴爾甲木索卿は病氣にて豫ねて定めし講話及質問に應ずるを得ずして歸られしは遺憾なりし、

られより藤岡勝二氏は西藏の經文に就て、白尾義夫氏は貫主の來朝に就て各一場の談話を爲して午後三時過ぎ散會したり、◎廿八日には各宗聯合歡迎會に臨まれぬ、今その服況を記さんに、先づ貫主出迎として午後一時各宗より一人づゝ淺草本願寺に出張し、豫ねて行迎所として設けたる駿河臺鈴木町薩摩治兵衛氏方に迎へ、同所に於て西有穆山師、雲照律師、南隱禪師の三師と會見あり、それより歡迎會場なる神田錦町なる錦輝館に赴かれたり、式の次第は、迎奏樂、第二貫主入場燒香、第三奏樂、第四開會の辭（本田稻光師）、第五奏樂、第六歡迎文朗讀（三浦子爵）、第七奏樂、第八貫主の禮詞（白尾義夫氏通譯）、第九奏樂、の順序にて、それより西有穆山師の發聲にて大清國皇帝陛下の萬歲を唱へ次に喇嘛貫主の代理として白尾義夫氏の發聲にて大日本皇帝陛下の萬歲を唱へ又次に西有穆山師の發聲にて、喇嘛貫主猊下の萬歲、貫主代理白尾氏發聲にて日本各宗道俗諸君の萬歲唱呼あり、式は是を以て終りたり、此日各宗聯合會よりは袈裟地の大和錦一卷、及び東亞佛教會の旗四旒を貫主に贈呈し、貫主は又來會者一同へ自筆の名刺一葉づゝを贈られたり、◎尚貫主は來る卅日頃出發上海に向はるゝよし◎喇嘛教貫主阿嘉呼圖克圖師は蒙古西寧府なる阿嘉に生れ神童の聞へ高く歳市めて六歳、喇嘛本山より見出され十二歳にして受戒したる高僧にして、元來同教には十哲ともいふべき高僧あり皆西藏本山より各地に分派せらるゝものにして之を呼圖克圖と稱す、阿嘉師は即うの十哲中の首座に位せり、◎元來喇嘛教といふは唐の貞觀年中、西藏にト、リ王なる豪傑出で唐の太宗が貢を命ずるを拒み戰ひを起したるが太宗終に敗北してト、リ王の請ふがまゝに文政公主なる一女を娶はしたり、王は又印度を征服し美人パイマサなる一女を聘したるが此二女與に佛教を信じ深く教理に頭じたるより、王は從來の西藏教と此支那、印度二佛教を合せ完成せしめたるが即ち喇嘛紅教なり◎元より明の初めに於て紅教極度に達したるが、明の末世に及んで新教起る是黃教なり爾來黃教の時代に移り蒙古、滿州、支那に瀰漫し之が法主なるものは政法二權を握りて今日に及ぶ、文字はト、リ王が使ひを印度に派しサンスクリットを骨子として從來の西藏文字を參酌したるなるが、サンスクリットの楷書と今日の西藏文字とは殆んと相同じ、西藏語の三藏經として世界に珍重せらるゝもの是なり◎貫主は新黃派に屬し前藏拉薩なる本山主達頻喇嘛の命を奉じ雍和宮に管主たるが、前にも記せし如く元來蒙古出身なれば隨つて勢力全蒙古に及び同國中には今尚三十六王あり皆阿嘉の一舉手一投足の下に服し居れり、以て露國が夙に阿嘉の歡心を求めんとするの眞相を察すへし◎吾人は此の大寶を誠心誠意を以て歡迎すると共に、將來日清兩國の交誼を溫め、彼我手を携へて大法護持の任を盡くさんことを望むや切なり（廿八日、會員某記）

紛々錄

◎六月は星亭の横死で、話が持切りであつたが、今月は喇嘛教貫主の渡來で、到處其呼聲が高い、世の中は妙なもので、

一の出來事去れば、又新しき事か絶ゑ間なく起りて來る、さて來月は何か起るであらふ

◎喇嘛教貫主の來朝で、佛教家は無論の事、其以外で歡迎するものは、進歩黨、帝國黨、國民同盟會であるとて、何か一種の政治的意味を含むかの樣に取越苦勞する人あれども、これは餘りに穿ち過きた推測であるとは、朝報記者の言、誠に適評であらうと思ふ

◎寺本君の持ち歸られた藏經は、北京の或處で日本軍隊の兵士か字を讀めぬ事として、將に火中に投せんとしたるを、之れを寺本君の發見する所となり、其筋に請ひて持ち歸り、今は淺草東別院に藏せらる

◎西藏は世界の秘密庫であると云はるゝ如く、何故に鎖國の方針であるかと云ふに、ヒマラヤの山腹に曾てシキム、ブータンの二國あり、教王の教を奉じ喇嘛教甚だ盛であつた、英軍其境を侵し、喇嘛を境外に放逐し土民を過する殘虐を極めた、於是教王以下皆大に憤り、凡て外人は我教法及教徒に危害を加ふるものであるから、決して國境内に入らしめないとて、各所に關門を建て支那人すら容易に出入することを許さゞる次第であると、聞けば最もの話である

◎俄に氣候回復して快晴になつたが、こうむし暑くては讀書も否やだ、午睡も否やだ、まして筆を執ることのいやさ加減は、數分間の後は、頭、咎々として千斤の石で押へられる樣である、身の措き處ないとは此等の時であらふ

◎避暑も結構、海水浴も結構であるが、斯樣な贅澤は好まぬ、否、吾々の身分は迚も許さなへ、獨り舊草廬にありて遠摩然とすさし込も亦甚可

雜錄

蟬ぢぐれ

小虚人

百度の蒸氣瀑を逸して吾れに迫る、身はこれ一介の窮措大、土龍窟火炎の爲めにおそはれ、煩悶やるに由なし、唯々朝風破窓をもれて餘惠を與ふる時新紙をもて思ひを人間と社會との表裏に派す呻吟時に朗詠と變じ、小憤以て大不平を胚胎す、アゝ吾れは今の社會に何等の要求なく、願望なし、高樓や美酒や、避暑や水泳や、其劣れる卑しき動物的慾望よりするものならじか、天道なく、人道なき世間の風潮にかられて悲ひにやれたるむさくろしき方丈を出づるは、終に吾れの興みせざるところ、休みなんかな、休みなん、吾れはたゞ汗くさきくゝり枕を友として豆をかみ水を呑み、白眼社會の經程をトはん、かくて吾れの念頭に浮び來るもの曰く政治家、曰く教育家、曰く實業家、曰く勞働者、曰く家庭、曰く青年、曰く義人、曰く宗教家、これ等紙をのべて筆をやれば既に十數紙をうづむ、而して之は滑稽一大滑稽ーてふ見方より幾分か自己の心血を沾したるものなれど、そはあまりに冗長にして閑文字徒らに讀者午睡の妨たらんを恐れ、今は只手枕の夢物語の切々なるを、かつ〳〵これをだにとて

一、大樹あり千枝萬葉を支ふ一たび幹朽ち根枯れんか、枝や葉や遂に地上の物にあらずして何ぞ、一星墜つ、無數惑星の行へ如何

二、天下の事豫め知る可らず、運命とは畢竟天か人か、朝に東郊に耕して夕べに北邙の煙と化す、富貴と榮譽と、名聲と勢力と、共にこれ運命の人爲的因淵に赴くの謂のみ、大丈夫一たび生を惜まゝ方さに陋巷に潛みて水を飲むべし

三、社會黨成らんとす、ハイカラ是が主動力なりと、平民主義喧傳す、所謂神の愛を說くものゝ業なりと、惟ふに西歐文明は一夜づくりの社會黨を喜ばざるべく、救主基督は社會の秩序を紊亂せんが爲に博愛を說かざりし、ハイカラ誤て……むしろ強會して……之を實にせんとす、早計淺慮むしろ憐むべきもの、謂めて曰く、大亂の機は一朝にして成らず、諸子若し眞に國家と社會とを知り而して之れを患ふる者ならんには、敢て輕々しく飛言せざれと

四、社會主義の勃興や平民黨の成立や予輩亦全然之れを否拒するものにあらず、否混沌として一の準繩なく明星なき吾社會は到底現狀を永久に維持しうべしとは信ずる能はざる者の一人なり、されどそを唱導するに時あり方法あり、理想の夢を現實にせんとす、急進それ或は不測の禍機を有せん、知らずや、這般の主張は多く無智頑愚なる下等社會によりて喜ばるゝのみなるを、彼等は自己以外國家社會を知らざるものなり、論者諸子うれ筆を濕ほし口を開かんとするに先ち瞑目して、自己的膨脹の據處を察知して未來の運を惟へ、氷釋せでは止まざらん、

されど誤る勿れ、誤て予輩を頑固舊弊の老錦と爲す勿れ予輩と雖も、吾が國の歷力は米佛等に比して重きものなるを知らざるにあらず、しかも上の說をなす所以の物は社會の秩序的發達……權利と權利を解する知識との……を完備せんの抱負を有すればなり、一言を添へて豫め惑をとく

五、大衆傳導なる者を見　青年子女三々五々隊をなし、吹流を負ひ、提灯をかゝげ「迷へる野邊の羊」など唱へ、貧者の慰めなりと揚言す、甚しきは可憐なる少女をして街路に廣告的なる、印刷物をふりまかしめ、或は痴老茶袴の女學生をして先づ高等淫賣とはこれかと怪ましむるものありと、アヽ大衆傳導なるかな、かくてこの陽氣なる行動は少くともお祭り的に貧者弱者の鬱散の安全瓣たりしならん、うべなり幷月ならずして二千の信者をゆしと傳ふるとや、されど記せよ、いかに腐れ鰯も頭數なりとはいへ、宗教の目的はこれにあらず、國家が宗教を要するの理もこれにあらざるを

六、基督教徒由來歷史的に博愛慈善主義の下に立つ、されどうは宗教ならなくも爲しうべき業ならじとか、安心立命これ

宗教の第一義諦ならずや、いかさま陽氣の振舞會堂をにぎはす(予輩別に「國家的宗教觀」中教會を論ずる一節あれども今は略す)のみが使徒の任にはあらざるべし、「毎日新聞」は大衆傳導の提灯を持て曰く、日本の基督教徒は政治的感情的二樣の壓迫の下にあり故に其教弘布せず、若し果して事實ならば這回教徒社會の壯舉ややぶれかぶれの所行とも見るべきか、然れども予輩の見る所にては正さに之を反對なる見解を有す、國會議長、大審院判事、市教育會長等にして日曜說教を爲すの自由を有せずや、此教門に入らざれば學生の貴目輕く女子の位置高まらずと威せられつゝあらざるか、すべての方面に於て利便を有し而も說教の科學的文學的なる點に於て佛教者に一頭地を抜くもの其衝に當り居るにあらずや、而して未だ一大勢力の日本に獨立して形成せられるものそも何等の事情あるか、アヽ何等の事情あるか

七、「日本」記して曰く佛教特に眞宗などの非常なる勢力を有したりしは全く親鸞蓮如等の鞋の功なりと、然りこれ千古の銘言、今の時これ鐵道の時代が必ずしも鞋宗の要なかるべきも、佛教者たるもの少しく往時を追想して祖師中興の冥慮を懼れ、現時に省みて自家の缺陷を知れ、說教演說が今少し社會問題と手を携ゆべきが如き其一、予輩望むべくんば先づ亞細亞大陸の佛教的連衡を期せん、蓋しこれ夢か、忽ち呼ぶものあり日本は佛教の博覽會場なりと、醒めよ、二十萬の佛教家諸士、諸氏の手一たび動かば淨き救ひの風を起さん

八、上既に述べたる如く、佛教家は政事家たるの權なく、基徒はこれを有す、佛教徒及び信者等はそれを掩ふて人目をつゝしまんと擬す、基徒はむしろ其信徒たるを鼻頭に醜へす、當年公認教を云爲せる佛教徒は今や寖く日本國に於ける特權を擧げて基督教徒に讓りつゝあるが如し、惟ふにこれ佛徒往々美名の下一日の安を貪り、着實と熱涙とを自教に與へざるが故のみ、何ぞ文明國の宗教たるの故を以て文學と深き關係あるの故を以てのみ彼が如き今日の結果を見んや、更らに教育家政事家等の佛教に力を献じて外護の任を全うせざるもまた其一因たりといふべし、されど〳〵今時宗教の傾向未だ定まらざるなり、要するに派手なる熱心なるものには弊害頗る多く、害なきものはヂミなるに加へて冷膽なり、アヽいづれをいづれと分たざるを喩へば五月雨どおこめたる五里の曠原にさまよへるが如し

九、要之、國家の爲めに憂ひ、社會の爲めに計るもの、社會の精神を察し、そが推移の方向と步調とを知らざる可らず、而して時々に應ずるの術を講ぜざる可らず、特に宗教家の如きは自家の信念を堅固ならしめざる可らず、若しうれ社會の萬事休せば、自らを堅うして金剛の如かるべし、虛名

求むべからず、衒談を事とすべからず、西洋崇拜にも節度なかるべからず、事誤て爰に出でざらんか、國家社會は決して汝に感謝せず、汝を容れず、終に汝を罰せずしては止まざらん、運命は意外に來るの謂なりと、知れ!!

閑文字思はず數頁を費すも只これ抽象的相談のみ、若しそれ方法手段の如きは他日を待つて詳說せん

本法院義讓講師に就て

本誌前號雜錄欄内に本多學士が先德餘香と題して、本法院義讓講師の逸事を記されたるが、今尾張國親父江町、富田泰巖氏より書面を以て誤謬を訂正されたり、左に掲げて同氏の厚意を謝す

記者識

不肖は本法院講師出生の近傍、加るに同師碑名の字を所持す聊か支吾する所あれば左に記す

講師は尾張國中島郡領内村大字二俣に生る、佐藤清次郎の二男、六歳にして出家す、始め法海と稱し後ち義讓と改む講師の實家は法衣商にして、多少の財産家なり同師は二俣より七八丁を距る上牧村に晋齋と云ふ醫師あり、此人に藏き四書、五經等の素讀を習ふに、絶えて忘るゝことなし、其後、尾張國葉栗郡丹羽村、鷲津在隣の門に入りて漢籍を學び年齡十六にして名古屋養念寺威廣院靈瑞振講の弟子となり、宗乘、餘乘等を學ぶ、云々

右大畧如此御座候早々

富田泰巖

信界

從順の心

清澤滿之

世の中に堪忍の敎は能く布かれてありて、或は事を爲すには忍耐が必要であるとか、ならぬ堪忍するが堪忍とかと云ふことが唱へられ、佛敎には忍辱の行と云ふことが大切に勸めてある、此は何故であるかと云ふに、世の中は一人の世の中でなくて、多數の人が、相集りて社會を作して居ることゆへ、我々が銘々勝手に自分自分の思ふ儘にはならぬは當然の事、其のみならず彼我意見の相違が本となりて、罵詈だの、讒謗だの、侮蔑だの、凌辱だのと云ふ樣なことが澤山生して來ることである、ろこで物の分つた人は、此の如き罵詈凌辱等に逢ふても、決して直に憤激發怒すると云ふ樣なことなく、能く堪忍の敎を守りて行けば、風波なくして、世の中が安穩になる譯であるが、若し人が此堪忍の敎を破りて、銘々勝手に行動するならば、世の中は、決して太平に治るものではない、故に堪忍の敎は、世の中の爲に、實に大切なる訓誡である、然るに同しく社會交際の根本とすべき今一つ大切なるものは、從順の心である、此從順の心は、特に君父や長上者に對する場合に於て、最も能く其必要が感せらるゝ、君父の命令に對して堪忍すると云ふては、不都合と云はざるを得ない、長上者の指揮に對しても、忍耐するでは、何だか滿足の樣子がない、君父に對して能く從順であるとか、長上者に對して能く從順であるとか云へば、直に深く趣味が感せらるゝことである、之を考へて見るに人々が堪忍の心さへ失はざれば、世の中は治まるには違ひないが、其丈では、唯治まると云ふのみで、其上に一種の趣味を表することが出來ない、其を能く調べて見ると、堪忍で治まりて居る世の中には、人々の胸の内には苦痛がなくなりて居らぬ、苦痛はあるけれども、世の爲め人の爲めであるから、辛抱して不平や不滿を抑へて居るのである、世と云ふものや、人と云ふものがなければ、コンナ苦痛を忍ばぬでもよいにと云ふ樣な工合で、ツマリ、世や人やに對して不快を脫せざる有樣である、世の中で、君の爲めだの、親の爲めだの、誰の爲めだの、彼の爲めだのと云ふて居る人々の有樣は、多くは此類である、此では堪忍の敎が、畢竟苦痛の種を蒔きつける樣なものである、ソコデ、堪忍の敎の根底として、從順の敎が必要である、從順の敎は、人々が、其胸裡に常に從順の心を懷持せんことを勸むるものである從順の心でも、其意味の取り樣によりては、不平や不滿の苦痛があると、云へぬこともないが、其は今此處に云ふ所で明了となる譯である、從順と云ふことを、我が彼にしたがふことであると云ふときは、我は果して彼にしたがふべき義務を有するものなるや、彼は果して我をしたがはしむべき權利あるものなるやなどと、疑問を生ずる場合がないとは云へぬ、而して若し彼に權利もなく、我に義務もなき場合には、從順の心に不平不滿が混合せぬとは云へぬ、此は畢竟從順と云ふことを法律思想抔から割り出して考ふるからである、道德でも、義務しらべの道德抔では、ヤハリ同樣である、今茲に從順の心と云ふのは、單純なる從順の心である、權利があるかないか、義務があるかないか、ソンナ事には一寸も關係なき從順の心である、吾人が從順せずして居ることの出來ぬ所より生する從順の心である、此從順の心が成立せざる間は、吾人は到底苦痛を離ることは、出來ないのである、然れば如何にして其從順の心は成立することであるか、吾人が佛陀の御慈悲に接したる時に成立するのである、吾人が佛陀の御慈悲に接して、自己を脫抑したるときは成立するのである、此從順の心は、常に感謝報恩の心を伴ふものである、他に壓抑せられてしたがふにわらずして、佛陀の慈光を認めて進んで之に從順せんことを欲するのである、決して不平不滿の苦痛を混ずるものではない、寧ろ從順の喜びを得んとするものである、此從順の心が本源となりて、而して社會交際の上に發動する所で、吾人は彼の堪忍の苦痛を脫却して、進んで、世人に從順するの快樂を得ることが出來る、此時吾人は世人を唯世人としては見ぬのである、佛陀の慈光の顯現として見るのである、其世人が如何なる態度で吾人に對するも、吾人は所謂頓にも逆にも共に佛陀が吾人をあはれみたまふものなるを信するが故に、吾人が若し其に對して不平不滿を思

ふか如きことわらば、吾人は吾人の從順の心の牢確ならさることを知り、愈從順の道に進まんことを期することである、

本部廣告

投稿を歡迎す

一、論文、雜錄の類を問はず、投稿を歡迎す。
但地方風俗、教界の狀態等は最も望む所なり

一、文章は長短を問はずと雖も、可成簡潔なるを要す

一、用紙は二十七字詰、二十四行にして楷書にて認ること

一、原稿宛名は左の通り
東京本郷森川町一番地、大日本佛教徒同盟會內、政教時報編輯員宛

修身齊家は人々一世の要路なり、夫れ修身とは貧富貴賤己れが身のほど〳〵を守りて、常に五倫の道を慎み行ふなり、貴にして憍ふることなかれ、富で奢ることなかれ、貧賤にして諂諛することなかれ、此を修身の德と云ふ、齊家とは常に家業を懈らず、妻子從類六親眷屬の間に於て克く和睦し、苟くも殘忍麁暴の行を慎むなり、意に稱ひたりとて濫りに貪ることなかれ、情に逆ひたりとて濫りに瞋ることなかれ、克く是非を辨別して公私を謬ることなかれ、質素節儉なるも慳吝鄙劣に陷らざれ、溫柔愛敬を存するも惑溺偏頗に涉らざれ、若し夫れ是の如くなれば家にありては家齊ひ、國にありては國治る、此人、、して祖先父母の家聲を墜さず、此人にして子孫千載の幸福を保つ、語に曰く、其人を待て而して後に行はると、希くは以て其人となるべし。

（行藏上人全集）

◉新刊廣告◉

文學博士 村上專精師述

眞俗二諦辨

全一冊

●定價一冊金拾三錢郵稅不要、但切手代用一割增

本書は村上文學博士か眞俗二諦の義に付き、極めて平易に、極めて通俗に、極めて明瞭に述べられましたもので、眞俗二諦と云へば誰れしもよく承知し居る事なれども、佛教の本旨を尋ねれば、眞俗二諦の說より外はありません、眞俗二諦と一口に云ふものゝ、實は八萬四千の法門皆之に包まれて居ると申しても宜し、去は各宗各派の教法は悉く眞諦俗諦の二門を開いて弘通したるに過ぎないものであります、

先づ本書ははじめに眞俗二諦の語を應用するに至りし濫觴を述べまして、眞俗二諦に對する一般の概念を與へ、次に聖道門諸宗に亙り、次に眞宗一家に限る眞俗二諦を辯ずること、縷々として盡きざるの感あります、其間諸經を引用して證となし、例を擧げて說明を容易ならしむる等用意周到、少しも遺憾なきものは本書であります、

宗教家は勿論佛教信者たる者は、必ず本書を一讀せられんことを望みます、

東京市本郷區森川町一番地
大日本佛教徒同盟會出版部

文學士 清澤滿之師序
文學士 近角常觀君著

信仰の餘瀝

再版刻成

●定價金拾五錢●特別減價拾貳錢但郵稅不要●郵券代用一割增

本書は著者が、活火炎々たる自家の信念を表白したるものにして、其說く所卑近に流れず、高遠に失せず、平易の裡、紛糾錯雜せる人生問題を捉へ來りてよく之を調理し、讀者をして憂然胸中秘奧の琴線に觸れしむるものあるを覺えしむ、苟も信仰の飢を叫ぶの士は、必ず一讀せられんことをすゝむ、

一、宗教的同朋。
二、活ける懺悔。
三、外、柔にして、內、剛なるべし。
四、聲をきくべし、光を見るべし。
五、我を捨てむと欲すれば捨つる能はず。
六、佛の人格。
七、地を固く踏めざれど常に步を進めよ。
八、信界に於ける監獄。
九、詩的信仰は一種の懈慢界なり。
一〇、宗教心は最も健全なる常識に外ならず。
一一、因果應報は宗教的自覺なり。
一二、相對世界の眞相。
一三、生きんが爲めに働くべからず、働かんが爲に生くべし。
一四、佛陀を近きに求めよ。
一五、信念に修養は實際問題に如くなし。

東京本郷森川町一番地
發行所 大日本佛教徒同盟會出版部

政教時報第六十號毎月二回一日十五日發行
明治三十一年十二月二十六日逓信省第三種郵便物認可
明治三十四年八月一日發兒

新刊書廣告

本月中は特に定價の一割引

織田得能師著 國文學十二種 佛語解釋

全一冊　六百頁　クロース製本

▲正價金一圓五十錢　▲郵稅十四錢

本書目次

竹取物語　枕草紙　榮花物語　大鏡
水鏡　增鏡　方丈記　十訓抄
徒然草　神皇正統記　古今集　拾遺集

國文とは佛教とは、古來我邦に於て、離る可らざる關係あるに係はらず、從來の註釋者往々之を忽にし適々之を註するも誤謬極めて多く爲に國文學の眞相を湮沒する慨歎なからず、師夙に茲に感あり前掲十二種に就き逐條佛教語を解釋し出典を明にし別に總索引を附し國文中の主要なる佛語は殆ど網羅せられざるなく國文學註釋の上に一般光明を與ふるものと云ふべし、國語學者並に斯學教育者に取つては是非一本を備ふべき者たり

織田得能師著 佛教金言集

全一冊　クロース製本

▲定價金二十五錢　▲郵稅四錢

師が一切藏經を閲讀せられたる傍ら大乘小乘諸經中より倫理と哲理に關する格言を拔粹して編纂せられたるものなり之を上下二編に分ち倫理部を教道編と名け哲學部を證道編と名け且つ一格言毎に極めて單簡なる俗解を附し本文俗解共に總より假名を施したるものにして浩翰なる佛教を倫理と哲學との兩方面より如何なる人にも通解し得らるゝやう編せられたるものなれは苟も斯道に志ある方は是非一本を具へて坐右の銘とせらるべし

發行所　東京市神田駿河臺西紅梅町十番地　光融館

◉發行所　大日本佛教徒同盟會出版部
（電話番號本局二四三二番）